

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 北井聡子

本論文「ネップ期ソ連における集団主義と性—アレクサンドラ・コロンタイを中心に」は、ロシア革命期の女性革命家にして性に関するラディカルな小説、論文を残したアレクサンドラ・コロンタイ(1873-1952)の思想を中心に、初期ボリシェヴィズムにおける〈集団主義と性〉の問題を明らかにしたものである。コロンタイは、女性を男たちの集団世界の一員にするための闘士であった。大半のボリシェヴィキにとって共産主義体制への移行と同時に女性解放されるものと考えられていたが、家父長制とは外的構造のみならず、精神構造など人間の内部に組み込まれたものであり、コロンタイは、おそらくボリシェヴィキの中でただ一人、家父長制の内部構造そのものの解体を模索した人物である。それは、コロンタイが書いた小説のヒロインの過激な性愛思想・行動の理由づけともなっている。またコロンタイ思想において徹底的に追求されたのは、女の〈男化〉であり、社会的性差の克服のみならず、身体構造の変化までが射程に入っていた。しかし女性が労働集団に男性として加わるときには、逆に誰かを「女性化」してしまうというパラドックスがあった。本論文は、コロンタイの著作を中心に、ネップ期ソヴィエト革命の展開をジェンダー/セクシュアリティの観点で、当時の哲学・思想・政治的背景のみならず、精神分析など現代の思想理論も用いて、鮮やかに読み解いた優れた独創性を有している。

本論文は、「序論」、四章の本文、「結語」から構成される。以下、その内容を要約する。

「序論」では、コロンタイの略歴、ネップの時代背景、コロンタイの研究史、19世紀末ロシアのエロス論の概要が述べられる。「第一章 父のないユートピア」では、コロンタイが理想とした集団主義世界とはいかなるものであったかが検討される。論文「実証主義的観点からの道德問題」(1905)を、ボリシェヴィキのボグダーノフの思想と比較しつつ読み解き、さらにコロンタイの求める集団世界のイメージが、宗教思想家ソロヴィヨフの「全一」哲学を継承するものであり、家父長的家族を消滅させるというコロンタイのパトスは「全一」的世界観と19世紀後半の女性解放思想とが融合されたものであること、つまり、ボリシェヴィキの家族政策は、「一なるもの」への統一のための破壊であったことを論証する。さらに、コロンタイとレーニンの革命意識がいかに異なっていたかを解説した上で、1921年第10回党大会においてコロンタイ率いる党内分派「労働者反対派」が、レーニンによってアナルコ・サンジカリズムとして断罪され、それ以後コロンタイは公にレーニン批判を許されなくなったことから、自身の主張をフィクションの世界で展開するようになったことを突き止めた。中編小説『偉大なる愛』(1923)は、レーニンとの対決を恋愛物語に変換したものであり、レーニンが党大会でコロンタイ一派を「病」のレトリックで批判し

たことに対する報復のように、レーニンがモデルと思われる主人公が病んでいることが判明する。つまり、これは「父殺し」の物語であり、コロンタイが目指した共産主義世界は、父（レーニン）無き兄弟たちの集団であることが解明される。

第二章『『働き蜂の恋』—女たちの絆の切断』は、コロンタイの小説集『働き蜂の恋』（1923）に収められた三つの作品の分析を行う。従来三作品は別々に考察されてきたが、本論ではすべてが「女性が私的領域から出て、公的な集団世界に入るまで」を描いたものとして論じられる。三作品に共通して重要なのは、「女と女の関係性」であり、ヒロインたちは次第に女の縦横の絆を断ち切っていくことで公的な男たちの集団世界に参入することが明らかになる。また『働き蜂の恋』というタイトルを、生物学者メチニコフによる女性の進化理論に基づいて検討する。メチニコフは蜜蜂の生態からの類推で、人間の女も労働に従事するに従って、女から男へと「進化」し、いずれ生殖能力を失うだろうと予言している。コロンタイの小説のヒロインたちも、労働者になるにつれ、生殖能力を失っていくことが、メチニコフ理論と関連づけられる。さらに、小説のヒロインの一人ジェーニャのラディカルな性行動の意味解釈に、ジュディス・バトラーのアンティゴネー神話の再解釈を援用する。アンティゴネーは従来のような家族を守る英雄ではなく、近親姦タブーを犯した者とされているこの説に基づき、ジェーニャの性行動を見ると、彼女が自分の母の新しい夫（つまり自分の父）と関係を結んだ意味は、家父長的家族を内部から瓦解させる行為であったことが究明される。

第三章「エロスの革命」は、1920年代の性愛の議論を扱う。家族が消滅した後に、性愛/エロスは公的空間を彷徨うことになり、1920年代ロシアでは性の議論は大いに盛り上がった。性愛に新たな場を探す議論の中心にいたのがコロンタイであった。本章では、コロンタイの性愛論の集大成である「翼の生えたエロスに道を！」（1923）を取り上げるが、これは従来、自由恋愛を謳ったものと思われてきた。しかし、この論文をロシア文化の文脈に置くと、全く違う意味が見えてくる。「翼の生えたエロス」とはプラトンの概念でありアイデア界と現実界を媒介するエロスが念頭に置かれていることを指摘した上で、さらにプラトンのエロス論をロシアに移植したソロヴィヨフの著作「愛の意味」との比較を行う。その結果、コロンタイの論文はブルジョワ体制の下では核家族を作り出すエネルギーであったエロスの力を集団世界全体を繋ぐエネルギーへの変換を求めたものであったことが明らかとなる。本章後半では、コロンタイの性愛論に対して起こったリアクションを見る。それは若者から絶大な人気を得る一方、児童学者で性愛に関して超保守的なザルキントからは、激的な批判を受けた。意外にもコロンタイとザルキントは「性愛を集団世界建設に役立てねばならない」という点では共通性をもっていたが、コロンタイはアイデア界と繋がるエロスを羽ばたかせ、ザルキントは性愛の取り締まりを志向していた。本章の最後では、プラトーフの小説「アンチセックス」（1926）の紹介を通して、両者の議論の行先がアンチユートピアであることが風刺的に批判される。

第四章「父性の復権」では、コロンタイが国内政治から撤退した後の初期ボリシェヴィ

キの女性や集団主義に関するラディカルな考え方が変質する様を描き出す。分析の対象となるのは、グラトコフの小説『セメント』(1925)、ローム監督、シクロフスキー脚本の映画『第三メシチャンスカヤ通り』(1927)、トレチャコフの戯曲『子供が欲しい』(1927)である。1926年はソ連の家族や性愛の議論の転換点であった。この年にあった集団レイプ事件、家族法改正への動きを通して家族消滅の議論は保守化の方向に進むことになる。上記三作品のヒロイン達はコロantaiのヒロイン達「新しい女」の遺伝子を受け継ぐ者だが、次第にその性格を変質させ、最終的に母性的女へと変貌し、男たちの集団世界から排斥されてゆく。これらの作品分析の中で特に際立っているのは、『セメント』のヒロイン、ダーシャをファリック・マザー幻想の産物として、ラカン派の精神分析による解釈を試みている箇所である。さらに、これら三作品の中で男たちの父性の喪失に対する不安が描かれていることが指摘される。家族消滅が達成されたとき、本当に消滅してしまう可能性があるのは母性ではなく父性であり、この男たちの不安が家父長的家族を復権させる一つの要因となったことが論究される。コロantaiの夢見た父なき兄弟だけの集団世界は、家父長的家族へと回帰する、というより、以前にも増して強化され一人の強大な父を擁立する大家族へと向かうことが予想される。

「結語」では、コロantaiの性愛論、集団主義の特性のまとめ、および1920年代半ばには彼女を中心とした初期ボリシェヴィキの目指した家族消滅論というユートピア的実験が経済的理由、人口減少の危機感などから中断されたことが確認された上で、血縁ではないオルタナティブな親密な関係、全ての人の幸福を目指す世界の実現という壮大な実験は、家族を超えた人間関係が模索される現代にとっても大いなる示唆を与えるものだと結論づけている。

審査委員会では、本論文の着眼点の独創性、論証の説得力、すなわちネップ期ソヴィエト革命の追求した集団主義をジェンダー/セクシュアリティの観点で解明したその問題設定の明快さ、論旨の明確さについて、高い評価が与えられた。従来、コロantaiの性愛論は、過激な性の自由化を主張したものと捉えられていたが、本論文では、コロantai思想の生まれた背景として、同時代のソロヴィヨフなどロシアの宗教思想家の「全一」思想や論文「愛の意味」との共通性、またボリシェヴィキ内でもレーニンではなくボグダーノフの追求していた集団主義や身体の変容をも含むラディカルな革命観との親近性を見出すことにより、全く新しいコロantai像を示すとともに、初期ボリシェヴィズムが希求した家父長的家族とは無縁の集団的社会の構想も明快に示された。北井氏は文章表現にも優れ、作品分析、論証の過程で導入される現代のジェンダー研究、精神分析、生物学など多岐に亘る理論の援用に全く無理がなく、非常に説得力がある論証となっている。第四章でコロantai以外の作者の小説、映画、戯曲など他のジャンルの作品も分析されているが、これらの選択も論の展開上適切なもので、成功している。全体としてコロantaiのテキスト分析にその政治的・社会的背景、哲学、思想、歴史、フェミニズム、精神分析など多くの分野の膨大な資料を読み込み、適切にそれらを反映して明快な論を組み立てた大労作として

評価できる。

一方、いくつかの問題点も指摘された。コロンタイは元来政治家であり、小説家ではなかったがゆえに、その小説は文学作品としての価値はそれほど高くないとはいえ、本論文ではコロンタイの小説の文体的分析が不十分ではないか。コロンタイの思想を育んだロシア文化のコンテクストは十分に調べられているが、エロスに社会をまとめ上げる力があるとする考えは、ロシアを超えたものであり、西欧の状況との比較があれば、さらに良い論文となっただろう。ソロヴィヨフの「全一性」やソボルノスチ、ボグダーノフの集団主義とコロンタイの目指したユートピア的集団社会の関連はよくわかったが、正教概念のソボルノスチと革命的な集団主義、さらに 30 年代ソ連の全体主義とのつながりについてはより詳しい説明が求められる、などである。

しかし、これらの指摘は、コロンタイの先鋭性、独自性および初期ボリシェヴィズムが目指した集団世界とジェンダーの関係を解明した本論文の価値を損なうものではない。以上から審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。